新・日本列島から日本人が消える日

上巻

ミナミ A アシュタール

加筆版

破・常識屋出版
ha-joshikiya-syuppan

新・日本列島から日本人が消える日　上

目　次

プロローグ　007

第一章　刷り込まれた勝者の歴史　018

第二章　宇宙のはじまり　056

第三章　テラ（地球）の誕生　068

第四章　本当に存在したムーとアトランティス文明　072

第五章　恐竜時代の謎を解き明かす　099

第六章　縄文時代は、超ハイテクな文明だった　107
第七章　大陸から支配された弥生時代　127
第八章　卑弥呼が八人？……邪馬台国は、和歌山？　145
第九章　神社の知られざる真実　157
第十章　飛鳥から戦国時代まで続いた権力争い　168
第十一章　織田信長の本当の思い　199
第十二章　豊臣秀吉が信長との約束を破った　258
第十三章　徳川家康が天下を取ったのは想定外の出来事　287

新・日本列島から日本人が消える日　下

目　次

第十四章　間違いだらけの江戸時代の認識　007
第十五章　明治維新はクーデター 黒幕は岩倉具視　053
第十六章　明治時代になぜ戦争が多いのか　109
第十七章　大正～昭和（戦前）までの裏歴史　145
第十八章　現代社会が腐っている理由　166
エピローグ（ここからが本題）　200
最後に　266

プロローグ

「ここは一体どこなんだよ……」
バスを待ちながら、私はひとり呟かずにいられなかった。

ここは、神奈川県藤沢市湘南台……という、どこにでもあるような小さな町。
そんな小さな町のバス停に立っていて聞こえてくるのは、私には理解できない言葉ばかり。
まわりを見渡すと、ほとんどが中国、インドネシア、韓国などのアジア系や、ブラジル、アルゼンチン、中近東、そして西洋系の外国人なのである。
それも旅行者ではなく、いかにも日本に住んでいて、仕事帰りという風情の外国人達。
これが大都会の新宿や渋谷、六本木あたりならまだ理解も出来る。
でもこんな地方都市の片隅の小さな町に、何で外国人がこんなにいるんだ？
このバス停だけじゃない、町のいたる所から聞こえてくる外国語……スーパーの食料品売り場でも、エスカレーターに乗っていても、いたる所から聞こえてくる外国語。
本当に、ここは一体どこなんだ？　日本じゃないのか？
この前、札幌に行った時も同じだった。

ホテルのロビーは中国人で溢れかえり、朝食を食べようとレストランに行けば、聞こえてくるのは中国語ばかり。思わず日本人を探したが私の目では見つけることが出来なかった。一瞬中国に来てしまったのかと錯覚するくらいである。
また同じ言葉を呟く私。「ここは一体どこなんだよ……」

「また始まっただけよ」
「えっ？　また始まった？　何が？」
「歴史は繰り返すって言うでしょ……明治維新や戦国時代、そして弥生時代、
そして、もっとさかのぼれば、アトランティスやムーの時代でも同じ事が起きた……
それが、また繰り返されているってこと」

私の人生は、ある女性との出会いによって大きく変わった。
その女性と出会う前、私は役者として二十二年の間舞台に立っていた。
十八歳の時に突然、役者になることを思い立ち、大学をやめ、上京。
数年の養成期間を経て、プロになって二十二年間、人生や社会に何の疑問を持つことなく、役者として舞台に立つ日々を送っていた。
どうすればいい舞台を創ることが出来るか……それだけが私の興味のあることだった。
そして私は、このままずっとこの生活は続いていくものだと信じて疑うことはなかった。

しかし、人生には時として思わぬ出来事が起きる。
これからお話しする、私の身に起きた出来事は、すべてウソ偽りのない本当の出来事だと
いうことをまずは伝えておきたいと思う。

その女性と初めて会ったのは、今から約十二年前。
私が養成所の講師をしていた劇団に、彼女が女優として入団してきたのである。
それから二年間は、劇団の忘年会などで年に二、三回顔を合わせる程度のものだった。
その関係が、三年目の忘年会で大きく変わったのである。
その年の忘年会で意気投合し、話が弾み、飲み過ぎた私たちは終電に乗り遅れ、
仕方がないので始発まで駅のマックで時間をつぶしていた。

突然だが、役者は儲からない……役者だけで生活が出来るのは、テレビに出ている
有名な役者だけで、私のような小さな劇団で芝居をしているような役者は、
他にも違う仕事をしなければ生きていけない。
ご多分に漏れず、私もサイドビジネスをしていた……
それが養成所の講師だったり、ソフト整体のセラピストだった。

セラピストをやってる時の他愛もないエピソードを面白おかしく話していたら、

彼女が唐突に聞いてきた。……「あの、レイキって知ってますか？？」
「レイキ？？　なに？それ？」
「そうですよね、知らないですよね……でも、セラピストしていらっしゃるなら、身体の外側のエネルギーのことも知ってるかな？って思って」
「身体の外側のエネルギー？？？　何それ？」

と聞きながら……これはマズイかもしれないと本気で思った。
忘年会で話をしている彼女は、いたって普通の人に見えた……が、実はマズイ人だったのかもしれない。何かの宗教か、それとも不思議ちゃん？？
いずれにしても、話をはぐらかさないと困ったことになるぞ。どうしよう？

「変な人だと思いました？」
「あ、……いや、そんな事はないけど、でも急に身体の外側のエネルギーと言われても……」
「そうですよね、みんなそう思いますよね……でも、本当にあるんですよ、エネルギー体って……、ほら、こうして触ってみることも出来るんですよ」と
自分の身体の外側二十センチ程のところを撫でるように手を動かす。
ヤバいぞ、本格的に話を始めちゃったぞ……どうやってこの場を乗り切るか……適当に

話を合わせながら、別の話題へもっていくしかないな……と、頭クルクルしながら逃げ方を考えていたが、フッと彼女の表情を見ると、本当に真剣に話をしているのがわかる。何かの勧誘や、ある意味（変な所へ）行っちゃった人の表情ではない。

私にもそれくらいは、わかる。どうしたものかと迷っていると、

「とにかくこうして手を出してみてください」と、自分の手を前に出しながら言うので、仕方なく手を彼女の方へ差し出すと、突然バチンと電気が走ったような、輪ゴムで弾かれたような鋭い衝撃が走った。

「痛！　何した？」思わず大声になる。

私の大声に、驚いた彼女は、

「何もしてないですよ。身体に触れてもいないですよね」と、

何もしていないというジェスチャーで手を上げる。

「でも、いまバチッていったよね、バチッて！」

「きっとエネルギー体が反応したんです。あつしさんが敏感だから、

衝撃的に感じたんじゃないですか？」

敏感？　敏感？　何に？？

私は、これまで目に見えないものはまるで信じていなかった。

そしてこれからも信じることはない……そう思っていた。

でも、実際これだけの衝撃を受けると、信じざるを得ない……
でも、見えないものはないはず……という矛盾の中で混乱していた。

これが、私の不思議な出来事の始まりなのである。
（今では不思議でも何でもない事なのだが、その時は不思議以外の何ものでもなかった）
何が起きたのかわからない……頭では理解できない……でも、何かある！
私の知らない世界があることだけはわかった。
それが何なのか知りたいと強く思った私は、また話を聞きたいと思い、
後日、彼女に連絡を取ったのである。
それが、不思議の国への第一歩を踏み出すことになるとは、
人生がこんなにも変わってしまうことになるとは……その時はぜんぜん思わなかった。

彼女の名前は、ミナミ。　私の名前は、あつし。
これが、この本の著者名、ミナミAアシュタール。ミナミはミナミ、
そして、ちょっと小さい主張になるがAが私、あつしのAなのである。
アシュタールに関してはまた後から説明するが、とにかくその後聞くミナミの話は、
常識の範囲から大きく逸脱しているのである。それがある意味面白い。

次にミナミに会った時、
「私ね、見えないものが見えたり、聞こえないものが聞こえたりするんですよね」って。
来たぁ〜〜、見えないものは見えない、聞こえないものは聞こえない私にとって、
どこをどう理解すればいいのか？？

「見えないものって、お化けとか？？」
「そうですね、お化けとかは昔はよく見えたけど、今は見るのはやめました」
「あ〜、そうですか……（やめたって言われてもよくわからないし）」
「でもね、聞くのはまだ聞くんですよ」
「聞くって、何を？　お化けの声とか？」
「お化けも、まぁ、聞こうと思えば聞けますけど、それは見るのと同じようにやめました。
でも、他の声はまだ聞いてます」
「あ〜、そうですか……（って、お化け以外の聞こえない声ってどんな声なんだ？）」
「あ〜、また変な人だと思うかもしれませんけど……」
「大丈夫、もうそこは心配しないで（十分思ってるし、それでも真面目に話を聞きたいと
思ってるんだから）」
「えっとね、テレパシーって知ってますか？」

「テレパシー？……言葉としては、何となくは聞いたことあるけど」
「ざっくり説明すると、遠くの人とか、見えない人とかと言葉を使わずに意志の疎通（話し）をすることをテレパシーっていうんですけどね、私、それが出来るんですよね」
「テレパシーで？誰と？話を？するの？　お化け？じゃないんでしょ？あと誰がいるの？」
「え～～っと、宇宙人……かな……」
「はい？　宇宙人？……かな？……　宇宙人？宇宙人？　」
「そ、宇宙人！」
「宇宙人。……宇宙人って……いるの？」
「いるんです」
「マジで！」
「はい。マジでいるんですよ」
目まいがした。やっぱりこの人は、おかしな人だったのか？　信じた私がバカなのか？
「信じられないですよね……」
「はい……ま、そんなには、……」
「ですよね、じゃあ、直接話してみますか？」
「え？、直接？どうやって？　俺、テレパシーなんて出来ないし……」

「あ、私が通訳しますから……そう、通訳をはさんで外国人と話をするみたいに思ってください。いいですか？やってみます？」
「……んじゃ、お言葉に甘えてちょっとだけ……」

ここでは何を話したかは言えない……言いたくても言えない、というか言わない……でも、信じざるを得ない出来事だった、とだけはお伝えしておこう。

そして、この宇宙人との初めて会話が、私にとっては決定的な出来事だった。
面白い……とにかく、むちゃくちゃ面白い……もっと、もっともっと、この宇宙人の話が聞きたい……とにかく、私のすべてを打ち破る話なのである。
今まで当たり前だと信じ込んでいた……私の中の常識、倫理、道徳、科学的根拠、宗教的な概念、お金というもの……すべてが打ち壊された……実に「破・常識」なのである。
もちろん、普通に考えればありえない事ばかりである……でも、どこかでそれが真実だと、私の胸の中にストンと落ちるのだ。根拠は何もない……でも真実だとわかる。
それでいい……と私は思った。この宇宙人の話を信じようと。
そして、この宇宙人の教えてくれることを、誰かそれを必要としている人に伝えたい……と心から思い、私は、それをすることを決めたのだ。
こうして、私は劇団を退団し、ミナミと二人でサロンを始めることにした。

これが、「破・常識あつし」の出来上がりなのである。

忘れていたが、ミナミとテレパシーで話をしている宇宙人は二人いる。
それが、アシュタールと、さくやさんと私たちが呼んでいる二人の宇宙人なのだ。
そう、このアシュタールが、ミナミAアシュタールのアシュタールである。
さくやさんは、申し訳ないが、名前の中には入っていない……
強いていうなら、Aの中にいる……かな？さくやさん、申し訳ないです。
でも、ミナミさくやAアシュタール、……では長すぎて、落語の寿限無のようになってしまうから、そこの所は、ひとつお含み置きいただければ嬉しいです。
まぁ、名前など宇宙人にとっては全く関係ないものらしく、私たち地球人が呼ぶ？認識する？ために、私たちが勝手につけさせてもらっただけのことだから、気にしなくていいよ……とさくやさんは言ってくれている……らしい。

実は、私は役者になろうと思う前は、学校の先生になりたかった。
それも、歴史が大好きだったから、社会の先生になりたくて、大学は教育学部を選んだのである。ただ、学校がつまらなくて一年でやめ、役者になるために上京したのだが。
でも、やっぱりまだ歴史が好き、それも日本史が大好き。
そして、さくやさんから聞く歴史が本当に面白い。聞けば聞くほど、

学校で教えられた歴史に感じていた違和感や疑問が解けていく……
やっぱり、教えられてきた歴史はウソばっかりだったのだと確信した。
だから、この本を書くことに決めたのだ。
歴史の真実がわかれば、今のこの社会がどうしてこんなに腐ってしまったのかがわかる、
そして腐りきったこの社会の、腐った原因がわかれば、
新しく気持ちのいい社会を創りなおすことが出来るんじゃないか？
そう思って、さくやさんに真実の歴史を教えてもらうことにしたのである。
歴史に関しては、アシュタールよりもさくやさんの方が詳しいので、
この本では主にさくやさんに登場してもらうことになる。

第一章　刷り込まれた勝者の歴史

「今のあなた達が教えられてる歴史ってね、真実ではないの。今の教育で教えられてる歴史は、勝者の歴史だってこと」
「勝者の歴史？」
「そう、勝者側の都合のいいように作られた歴史だってことね。たとえばね、わかりやすいのが、アメリカインディアンの話よね。アメリカインディアンについてどう思ってる？」
「アメリカインディアンっていうと、西部の開拓者を襲う野蛮な民族っていうイメージが強いかな」
「教科書では、どう教えられた？」
「アメリカ大陸に勇敢な人々が開拓者として移民してきて、原野で人も住めないような土地を苦労して耕し、今の豊かで自由の国を創ったアメリカの祖先達を目の敵にして、夜襲を繰り返し、幌馬車を襲い、開拓を困らせた原始的な民族。
卑怯で残忍で、女子供でさえ容赦なく殺していった……って感じかな？」
「本当にそう思ってる？」

「学校だけじゃなくて映画とかでも同じ事言ってるでしょ、……コロンブスが大陸を発見して、その大陸を目指して勇敢な西洋諸国の人達が移民を始めた……
その人達が苦労して作り上げたのがアメリカ合衆国なんでしょ」
「自由の国アメリカバンザイ！ってね。完全に開拓者が良い人で、インディアンは凶暴な悪い部族だという物語になってしまってるけどね、ちょっと考えてみて……
それって違う角度から見たらどうかしら？」
「違う角度って、どういうこと？」
「インディアンの方から、その歴史を見てみるってことよ」
「インディアンの方から歴史を見てみる……」
「そう、最初にその土地に住んでいたのは誰？」
「インディアン？」
「そうよね、彼らはずっと祖先から何代にもわたってそこで平和に暮らしてた。
そこに突然知らない人達が来て、ここは自分達の土地だから出ていけ……と言われた。
普通どうする？　ハイそうですか……って出ていくかしら？」
「そりゃ文句言うでしょ……」
「そ、だから文句を言ったの。そしたら暴力で追い出そうとされた。普通ならどうする？」
「そりゃ、自分達も戦うよね」
「そうでしょ……ケンカを売ったのはどっち？　普通に考えてどちらの方が

理不尽なことをしてると思う？」
「移住者たち？」
「ね、インディアンの方から歴史を見れば、まったく逆のものになるでしょ。
それが、勝者側の歴史だってこと。
勝った方は自分達の都合のいいように事実を捻じ曲げる。
自分達がどんなに理不尽で酷い事をしたかを知られないようにするために、
負けたほうを悪者として作り上げ、自分達の正当性を主張するの。
負けたほうを徹底的に悪者にすることで、その人達に対して憎悪の気持ちを持たせるの。
そんな人、酷い人達なら殺されても仕方ないね……と人々を納得させるために、
悪者にする物語をたくさん作り上げる。
奇襲をしたり、女子供まで容赦なく虐殺していたのは、インディアンではなく、
実は移住者達だったのよ。その土地には先住民がいることを知った上で、
最初から土地を奪うつもりで移住してきてるんだから武器も用意してるし、
屈強な兵士達もたくさんいた。
だから、安心して平和に暮らしてたインディアンが戦っても勝てる訳ないのよ」
「勝者の作った歴史ねぇ～～そういうことか、
そう言われてみれば確かに後から来た人間が、先住民を追い出したって言われたほうが
理が叶ってて事実だと思えるよね」

「事実は事実であったのよ……でもそれをどの角度で見るかで、まったく違う物語になってくるってこと。そして、その勝者側に都合のいい角度で書かれた物語が、真実として子供達に教えられていく。
そのうちにそれが真実の歴史だと思い込んでしまうってことになっていくの。
そんな捻じ曲げられた歴史をいくら勉強しても研究しても、
真実にはたどり着けないってことなのよね」
「そんな歴史いっぱいあるんだろうなぁ～～」
「そうね、さっきも言ったけど、今の学校で教えられてる歴史は、
みんな勝者の側が作りあげた物語。真実とはかけ離れたものだということ」
「日本でもあるんだろうな……」

「一番近いところでは、明治維新ね」
「明治維新……」
「明治維新って、どう習った？」
「文明開化？　鎖国して、封建制度で身分差別があり、庶民には自由がまったくなかった
酷い政治をしていた江戸幕府が倒れ、鎖国をやめたおかげで外国から新しい文化が
流れ込み、自由な民主主義の国家が出来た素晴らしい出来事……って感じかな」
「そうよね、そう教えないと明治維新バンザイにならないからね。

江戸は悪い時代で、明治からは良い時代、良い国が出来た……
それってインディアンを悪者にして移住者がしたことを覆い隠す方法と同じじゃない？
明治維新を素晴らしいことだと思わせるためにね」
「明治維新は、日本が文明国として世界に躍り出ることが出来た
素晴らしい出来事じゃないってこと？」
「明治維新は、一握りの人が良い思いをするために画策したクーデター。自分達の利益のために無理やり国を開き、外国を呼び寄せ、外国に国を売った人がいるってこと」
「でも、西洋文明が入って来て、資本主義になって経済も発展し、
人々の暮らしは豊かになったよね」

「そうかしら？　明治維新後、何が起きた？」
「何が……何だろう……」
「江戸時代二百六十年間なかったこと……」
「戦争？」
「そう、江戸時代は戦争がなく、平和で人々も安心して豊かに暮らしてたわ。そうじゃなきゃ二百六十年も続かないでしょ。封建制度で、人々は苦しい生活を余儀なくされていたって言われてるけど、いくらおとなしい人々でも、そんな酷い幕府なら二百六十年も黙って耐えていないわよ。おまけに、世界でも素晴らしいとされている江戸文化なんて

栄える訳ないでしょ？
あの文化が栄えたのは人々が心も経済的にも余裕があったからなの。
そしてね、西洋的な機械はなかったけど、素晴らしい技術はあったわ。
クギを一本も使わずに橋や建物を建てることが出来た……これって高い技術がなければ、
すごい知識がなければ出来ないことでしょ。今のあなた達の技術と知識を以ってしても、
同じ物を造ることは出来ないでしょ。それだけ平和で豊かな国だったってこと。
で、開国してからは戦争ばかりが続き、資本主義という名のもと貧富の差が
どんどん大きくなっていったわ。それが素晴らしい出来事なのかしら？」
「そう言われてしまえば、そんな気もするけど……でも、江戸とは違う近代的な文明は
栄えたよね。それはそれで素晴らしい文明じゃないのかなぁ～～」

「近代的な文明……それは西洋の文化に組み込まれたってことよね。
江戸には独自の文化があって、十分に成り立っていた。何も不自由なことはなかったのよ。
それが、明治維新で開国してからは、どんどん西洋文明が入って来て、
西洋文明最高、西洋文明礼賛、どんどん西洋に追いつけと言われ、
江戸の人々の文明は遅れたもの、ダメなもの、原始的なものとして軽視して
西洋の文明だけを良いものとして受け入れた。
金融も、教育制度も、生活様式も全部西洋のものと入れ替わっていった。

これは、意図的に西洋文明を取り入れることで西洋に飲み込まれてしまったってことでしょ。
今のあなた達の生活は、すべてここから始まってる……六歳になったら学校に行くことも、銀行の仕組みも、会社の仕組みも、すべて西洋のやり方に変わってしまった。
そして究極が、戦争。どうして西洋の文明は戦争ばかりしてるかわかる？
戦争が儲かるから。戦争をすればお金が儲かるから……だから欧米人達は日本も西洋に組み込み、たくさん戦争が出来る国にしたかった。それを手伝った人達が日本にもいて、日本の中からドアを開き、欧米に日本を売り渡したの」
「日本を売り渡した人って誰なの？」
「それが明治維新の立役者と言われる人達……
長州ファイブとか言われてる人達いるでしょ。素晴らしい功績があると……
その人達のおかげで日本は近代国家になれた、と言われてる人達……
その人達がしたことは、日本を外国に売り渡したってことなの。
ある意味、日本を西洋の属国にしてしまったってことなの」
「何でそんなことをする必要があるの？　同じ日本人なのに、日本を売り渡すことなんて出来る訳ないじゃない。そんなのおかしいよ」
「彼らはね、江戸の頃は日の当たる所に出られなかったの、幕府がしっかりとしてたから。でも、どうしても権力が欲しかった。日の当たる所に出て、
自分達の存在を思い知らせたかった。

だから、日本を売り渡してでも権力を手にすることを選んだの。
だから、明治維新は、一握りの人達のクーデターだと言ったの」

「権力……」
「日本を自分達の手で支配したかったのね。そして、今もそれが続いてる。
ちょっと調べればわかると思うけど……今の日本の社会の中枢にいる人達が、
そのクーデターを起こした人達の子孫でしょ。同じ地域から何人も国のトップ（総理大臣）
が出てるし、政府の高官や政治家達は、ほとんどみんな親戚だってこと。
そしてね、明治維新の時に欧米の力を借りたものだから、そして、その地域の人達、
親戚一同が常に政府のトップにいて権力を行使できる地位につき続けるために、
欧米には逆らえなくなってしまった。だから、欧米の指示のもと何度も戦争を繰り返して
きたの、欧米にお金を儲けさせるためにね」

「今もそれが続いてるって、でも日本は独立国としてしっかりと立ってるよ。
西洋の属国ではないよね」
「そうかしら？　じゃあどうしてそんなに税金ばかり払ってるのに、
いつもいつも政府はお金がないって言うのかしら？」
「国の運営にはお金がかかるから？」

「ちゃんと運営していたらそんなにお金は必要ないわ。日本の税金を他の国に差し出してるからなのよ。調べればわかるわ。特にアメリカにはたくさん差し出してる。
それは、明治維新からの流れがあるから……
自分達の地位を守るために国民の税金を差し出しているのよ。
そして、今また始めようとしているのが戦争ね……
彼らのために日本をまた戦争に駆り出そうとしている。
そして、たくさんの外国人達（移民）を受け入れようとしているの……
だから、あなたがぼやいていたように、
こんなに急に外国人達が日本にいるようになったのよ」
「確かに、なんか戦争がしたくて仕方がないようには思えるな。不自然としか思えない、いろんな、きな臭いことも起きてるし。でも、移民はよくわからないな。
どうして移民？　外国人をたくさん入れる必要があるの？」
「その話はね、もっと時代をさかのぼって話をしないと理解出来ないと思うわ」
「時代をさかのぼるって……どの辺の話なの？」
「そうね、縄文時代かしら？」
「縄文？……て、……またずいぶん昔の話に行くねぇ～～」
「縄文の頃のことが理解できないと、どうして外国人がたくさん移住して来てるかが理解できないから」

「縄文時代って……学校ではそんなに教えてもらってないんだけど、
でも原始的な時代だったんでしょ？」
「そうよね、そう教えるしかないわよね」
「どういうこと？」
「次の弥生時代を良い時代だと思わせるためにね」
「えっ？　弥生時代を良い時代だと思わせるためって？　どういうこと？」
「だから、明治維新と同じだってことよ。
縄文時代の人々の生活って、学校でどういう風に習った？」
「ほとんど原始的な生活で、狩猟、漁猟、採集、で生きてた。そうそう、貝をいっぱい
食べてたらしいよね……だからいっぱい貝塚が残ってる。あと矢じりとか作って
獲物を獲って食べてた。縄文の頃の情報はそのくらいかな……」
「そうでしょ、そして、そんな原始的な縄文時代から、弥生時代になって
良い文明が始まった……ってね。どう、明治維新と同じでしょ？」
「だって、それが真実でしょ？　明治維新とは違うと思うけど……
縄文時代には稲作もなくて、その日獲れたものを食べる、その日暮らしだったけど、
弥生になってから稲作が始まったおかげで、食べ物を保存することが出来て、
人々は豊かに安心して暮らせるようになったんだから、すごく進歩したんじゃないの？」

「縄文土器って見たことある？」
「教科書の写真で見たことはあるけど……」
「じゃあ、弥生式土器は？」
「それも、教科書でちょっとだけ見たけど……」
「たぶん縄文の土器と、弥生の土器、二つ同じ所に掲載されてたと思うけど、その二つの土器を見てどう思った？」
「縄文の土器は派手だなって（笑）」
「それだけ？　弥生土器と比べて何も感じなかったの？」
「大分雰囲気は違うなとは思ったけど……」
「で、教科書では、縄文時代の土器より弥生式の土器の方が優れてるって書いてなかった？」
「そうそう、そう書いてあった。弥生式土器の方が優れているって」
「写真見てホントにそう思った？　縄文の土器はあなたも言ったように派手でたくさんの装飾がされてるわよね。でも、弥生式土器はそんな装飾はないわ。どっちの方が技術的に難しいかしら？」
「でも、縄文の土器は祭儀用で実用的ではなく、もろくてすぐに壊れるけど、弥生の土器は日常で使えるほど強くて頑丈だって……
だから、弥生の土器の方が優れてるって聞いたよ」

「でも、そんなに弱くてもろい土器がどうしてそんなにほとんど現状の形のまま残ってるのかしら？　そんなにもろい土器なら、土の中に長い間埋もれていたら形もなく壊れてしまうわよね。
そして、その日暮らしでほとんど文明などという生活からほど遠い原始的な人々が、そんな手の込んだ装飾を施した土器を作れるのか？って考えたことある？」
「……ない……かな……」
「教科書に書いてあるから？……それが真実だって？？」
「教科書通りに覚えないと、試験で困るからね……
俺もちょっとおかしいなとは思ってたんだけどね……」

「縄文時代は、原始時代じゃないの。すごく高いテクノロジーを持ってたわ。
だからあれだけの土器を焼くことが出来たの。あの土器はすごく高温で短時間で焼かないと出来ないの。それだけの技術を持ってた時代なのよ」
「じゃあ、どうしてそんなテクノロジーがあったのに、弥生時代に変わったの？
弥生より縄文の方が優れた時代なら、そのまま続くんじゃないの？
どうして弥生時代になったの？」
「そこが、移民の問題に関わってくるの」
「どうして？　だいたい移民ってどこから来たの？」

「まずね、縄文の文明はとても平和だったってことを覚えておいてね。
どうしてかというと、所有という概念を持たなかったから。地球にあるものすべてが、
みんなの物だという考え方だったの。それは共有ということではなくて、
すべて地球に与えられてる、もらっていると考えてた。
みんな平等に必要なものは、必要な時に、必要なだけ手に入れることが出来ると信じてた。
だから食べ物を保存するとか、稲作のように自分で作るという考えがなかったの。
でも、そうだから何かを誰かと取り合うなんてことも考えつかないくらい
平和に暮らしてたの。だから、一万年以上も続いたのよ。
そこに少しずつ大陸から移民が入って来るようになった……
そして、縄文の終わり頃に大勢の移民が日本列島に渡って来たの。
そこから弥生時代が始まったってわけ」
「でも、そんなにたくさんの人達が移住して来たら、いくら平和な縄文の人々も
抵抗するでしょ？　インディアンみたいに……」
「そこが、縄文なのよ。さっきも言ったけど、彼らには所有の概念がなかった。
だから、どんな人達が来ても、それはウエルカムなの。だって、自分たちの土地なんて
いう考え方がないから、みんなで一緒に暮らしましょうってなるでしょ」
「そうか！自分たちの土地という考え方がなければそうなるよね」

「そうこうしているうちに、移住してきた人達が縄文の人々を排除し始めたの」
「どうして？　一緒に暮らせばいいんじゃないの？」
「それよね……でもね、縄文の子たちと移住してきた人達の考え方が
まるで違っていたの。決定的に違ったのは、所有という概念。
縄文の子たちは土地はみんなのもの、地球から借りているもの……という考え方。
移住してきた人達の考え方は、土地は所有するもの。
だから、ぼやぼやしているうちに、どんどん土地を奪われ追い出されていった。
そして、北と南に追いやられてしまって、縄文時代は終わり、弥生時代が始まった」
「それが、弥生時代の始まりだってことなのか……
じゃあ、今の日本人は、その大陸から渡って来た人達の子孫ってことになるの？」
「そうなるわね、純粋な縄文の子たちは、ほとんど排除されちゃったから……」
「そうなのかぁ、なんか複雑な気分」
「まぁ、厳密にいえば、今の日本人は、縄文の子と大陸から渡ってきた人達のハーフ、
半分じゃないからハーフじゃないけど、でも縄文の子たちの遺伝子は入ってるわ。
でね、その弥生人達が、自分達が縄文人たちにしたことを隠すために、
明治維新と同じように、アメリカインディアンと同じように、
移住してきた弥生人達の都合の良い歴史物語が伝えられてきたってことなのよね」
「……」

「その後の日本列島の話になるけど……所有の概念を持つ人達は土地を取り合うことになるでしょ……それがずっと続いていくの……土地をたくさん持ってる人が権力も持つことになる……だから、権力争いの時代が続く。
権力者が変わるごとに時代の名前も変わる……弥生から古墳（飛鳥）、奈良、平安、鎌倉、南北朝、室町、戦国時代……ってね。
これは、ずっと争いの歴史……その頂点が戦国時代。
もうあっちこっちで土地の取り合い合戦ね。
そこに生まれてきたのが、織田信長君。
この子が生まれき来たおかげで、戦乱の世が終わって平和な江戸時代が始まるの」

「織田信長が？　でも、この人は途中で殺されてしまったから、この人が戦乱を終わらせたわけじゃないよね。戦乱の世を平定して、江戸幕府を作ったのは徳川家康でしょ？」
「厳密にいえばそうとも言えるけど、でも、その計画を作ったのは織田信長君なのよ」
「え？え？え？、ちょっと待ってよ……その計画って何？」
「そうねぇ～～、その計画を名付けてみれば……
みんなで戦乱を終わらせ平和な国を創ろう大作戦！って感じかしら（笑）」
「もう訳がわからないんだけど……だいたい、みんなって誰よ」

「中心的に動いたのは、信長君と秀吉君と家康君……あと何名かいたけどね」
「ちょっと待って、その人達戦ったんだよ……なんで一緒に創ろう大作戦！なんだよ？
まったく意味がわからない」

「まぁ、後からゆっくり説明するけどね……その三人は言ってみればグルだったってこと。
お互い争ってる形を取りながら、同じ目的のために動いていたの。仲間だったのよ。
ざっくり話をするとね、まず信長君が先陣を切ってある程度みんなを静める……
そして、その後に秀吉君が日本を統一する……
家康君は秀吉君をサポートする……っていう作戦。
途中でちょっと秀吉君が違う方向へ行っちゃったから、急きょ作戦を変更して、
家康君が前面に出て江戸幕府を開くことになったのよ」

「その作戦の目的って……言っても、結局今までの権力者と同じように、自分達が
権力を握って日本を支配したかっただけじゃない。それまでの時代と何も変わらないよね」
「そうじゃないのよ、あの子たちが創りたかったのは、縄文の頃のような日本なの。
争いのない、平和で、人々が豊かで笑っていられる国……それを創りたかったの。
権力が欲しくて平定したかった訳じゃないの……だから、鎖国をしたの。
縄文の頃のようにならないために……日本だけの文化を大切にしようとしたの。

だから二百六十年も平和で豊かな文化が育ち、花開くことが出来たの」

「それを、中からあけて外国に売り渡した人がいた……そこから明治維新が始まった？」

「そういうことね」

「でもね、さっきから聞いてると、なんか日本人は良いけど、外国人は悪い……的な、結構な選民思想に感じるんだよね。外国人が入ってくると日本は悪くなる……外国人は排除しよう……みたいな。それって、なんかイヤだな」

「そうよね、今までの説明だとそう感じるわよね……わかるわよ。

でもね、それは日本人が良くて、外国人が悪いっていう選民的な思想じゃなくて、考え方がまったく違うってことなの。

縄文の子たちと弥生人の考え方がまったく違ったのと同じね。

もっと言っちゃうとね、外国の人達は、日本列島に住む人々が嫌いなの……

ここが大事なんだけどね、日本人が嫌いなんじゃなくて、

〝日本列島に住む人々〟が、嫌いなの。

だから日本列島に住む人々をいつも支配して、自分達の都合の良いようにしようとするの。

だから、信長君も日本列島に外国人を入れないように鎖国したの。

外国人より日本列島に住む人々が偉いという選民思想じゃなくて、自分達を守るためにね」

「自分達を守るために？　まったくさっぱりわからないんだけど……」

「どうしてそういう話になるのかを説明するためにはね、
もっと時代をさかのぼらないとね」
「また、さかのぼるの？　縄文時代の前の時代っていったいどこよ？
今度はどこまでさかのぼるの？」

「そうね、アトランティスとムーの頃かしらね」
「アトランティスとムー……って……
そんなの伝説の文明で、ホントにあったかどうかもわからないよね」
「あったのよ……それも同時に存在していた文明なの」
「アトランティスはまだなんとなくあるとは思うけど、
ムーって、ただの大陸の名前で文明があったなんて誰も言ってないよ」
「じゃあ、レムリア文明っていうのは聞いたことはない？」
「レムリア文明……それならちょっと聞いたことはあるかな……」
「そのレムリア文明って呼ばれているのが、私が言ってるムーなの」
「もうほとんど俺の理解の範囲を超えてるけど……
で、そのアトランティスとムー？　レムリア？　と、
外国と日本列島とどういう関係があるの？」

「またまた突然だけど……私は誰でしょう？」
「イヤ、急にそんなこと聞かれても……」
「あなたは、誰と話をしてる？」
「さくやさん？」
「そう、で、私は何者？」
「……宇宙人？……」
「そう、私は宇宙人……ここまでは大丈夫？」
「そこまでは、何とか……大丈夫かと……」
「じゃあ、宇宙人はいる……って言うことまでは大丈夫だということで、話を進めるわよ」
「まぁ、うん……」

「あなた達人間にも種族がたくさんいるわね？」
「種族？　人種ってこと？」
「そう、白い肌の人、黄色めの人、黒い人、赤っぽい人、……いろんな種族がいるわよね」
「いる……よね」
「それと同じように、宇宙人にもいろんな種族がいるの」
「宇宙人の種族？」
「まぁ、姿形の違いね……それと、考え方の違い……考え方の違いの方が厄介なんだけど」

「で、その宇宙種族がどうしたの？」
「昔から、地球にね、というより人類に関わってる宇宙人が何種族かいるの」
「人類に関わってる宇宙人？……イヤイヤもうほとんどＳＦの世界だね……小説の中の話みたい」

「それでいいわ、小説の中の話として聞いてもらっていいわ……
これからもっとＳＦみたいな話になっていくから（笑）
今から話すことは、あなたの知ってる情報、知識とはまったく違うものだから驚くかもしれないけど、事実だから伝えるわね。
これがわからないと真実の歴史がわからなくなるから」
「がんばり、ます。」
「頑張らなくていいから、ＳＦの小説を楽しむ感じでいいから（笑）
宇宙種族の話まで行ったのよね……人類に関与してる宇宙人は何種族かいるんだけど、大きく関わってるのが爬虫類人と呼ばれてる種族なの」

「爬虫類人ねぇ……」
「ＳＦでいいから（笑）」
「その爬虫類人、レプティリアンとも呼ばれてるんだけど、

そのレプティリアンが創った文明がアトランティス文明なのよ。あ、誤解しないでね。レプティリアンのすべてじゃなくて、一部のレプティリアンね。
日本人にもいろいろな考え方の人がいるでしょ。レプティリアンもそう。
だからここで文明に関与したのは一部のレプティリアンだということは言っておくわね」

「宇宙人が創った文明？　人類じゃなくて？」
「そう、宇宙人が創った文明なの。そしてね、私たちは水棲龍族……ドラコニアンと呼ばれる宇宙種族……そして私たちが創ったのがレムリア文明。
この二つの文明が欧米の文明と日本列島で出来た文明に大きく影響してるの」

「もしかして、そのレプティリアンとさくやさんたちドラコニアンが仲が悪くて、ケンカしてたとか？　領土の取り合いをしてたとか？　だから、いまも日本と外国（欧米）的な対立関係があるとか？　だから日本列島に外国人を入れることを拒否してるとか？」
「そんなんじゃないわ、ケンカとかじゃなくて、考え方がまったく違ってるだけなの。どこから話そうかしらね……もともとは、地球にはアトランティス文明しかなかったの。このアトランティス文明がね、人間達にはなかなかツライ文明でね……」
「なかなかツライ文明って？　文明に楽しい文明、ツライ文明ってあるの？
文明なんて自然に出来るものでしょ。わざわざツライ文明なんて創らないよね。

そんなのありえないよね」
「人間が創った文明じゃないから……さっきも言ったけど、アトランティス文明は宇宙人が自分達のために創った文明なの。だから、人間達のことは二の次っていうか、全然考えてない文明だったの。そうね、はっきり言ってしまえば、レプティリアン達が楽しく暮らすことが出来るように人間達を使役してたってこと。人間達に労働をさせて、いろんな物を搾取してた。そういう文明、社会だったの。
そして、あまりのツラさに逃げ出した人々がいたの……
その人々を助けて私たちが創ったのが、レムリア文明だということ」

「そんなことをしたら、レプティリアンとドラコニアンは仲が悪くなるでしょ。ケンカになるでしょ？　だから、お互いの文明で争い合ってたってこと？
それが今でも続いてるってこと？　宇宙人のケンカに人間が巻き込まれてるって感じ？」
「違うのよ、もともと私たちドラコニアンとレプティリアンは考え方がまったく違ったの。まったく逆の考え方をしてるの。だから本当なら、私たちは彼らとは関わらないんだけど、この時ばかりは関わらざるを得なかったの」
「どうして？」
「地球に頼まれたから……」

またまた来たぁ〜〜、今度は地球かよ〜〜、宇宙人の次は、地球かよ〜〜、
その上に地球がしゃべるってか？　俺、今、妄想で誰かとしゃべってる？
勝手に自分で宇宙人とか創りだしてしゃべってるつもりになってる？？
いや、実際に話をしてるのはミナミだから、ミナミの妄想か？
ミナミがすべて妄想で話を創ってるのか？　わけがわからねぇ〜〜。
でも、待てよ……初めてさくやさんと話をした時、俺、納得したよね。
納得せざるを得ない状況だったよね……ミナミの妄想では片付かない話だったよね……
じゃあ、レプティリアンだの、ドラコニアンだの、アトランティスだの、ムーだの、
って話はマジってこと？　マジかよ〜〜

「（笑）もういいかしら？　話を続ける？それとも、もうやめる？」
「わかった、わかった、とにかく地球がしゃべって、
さくやさんに頼んだのね？（もうやけくそだよ）……で、なんて頼んだの？」
「私たちは地球のことをテラって呼んでるんだけどね……テラにも意識や感情はあるの。
それは、私たちやあなた達と同じ。ただ、テラの言葉があなた達に理解出来ないだけなの。

言葉というより、テラはテレパシーで話をするから、
それをあなたが受け取れないだけなんだけどね。
だから、テラもツラくなっちゃったのよ……だって自分の上で人間たちがツライ、ツライ、
しんどい、しんどい……って思ってるでしょ。それはテレパシーとして伝わってくるの。
そして、そのツラさをテラも共振して苦しくて仕方がなくなったの。
で、私たちに何とかして欲しいって言ってきたのよ」
「人間が思ってること、テラも感じるの？」
「そう、共振するっていうことね、あなたもあるでしょ？　友達とか家族が泣いてたり、
怒ってたりしたら、同じように悲しくなったり、腹がたったりすることが……
それも共振なのよ」
「あ〜、あるある……」
「そんな感じかしらね、テラの表面にいるってことは、テラと一緒にいるってことだから。
そして、ちょうどその頃に、そのアトランティスの社会から逃げ出した人々がいたの。
どこに行っていいかわからなくて困っていた子たちを見つけて、
アトランティスの社会とは違うところに連れて行ったの……それがムー。
私たちはね、レプティリアンとはまったく違う考え方をしていて、
人間を友達だと思ってるの」

「レプティリアン達は、人間を奴隷みたいに考えてた？」
「そう、でも私たちはそんな考え方を持ってないから、
誰か自分以外を支配・コントロールするっていうのは、
自由への介入になると考えてるからそんなことはしない。
だからムーの文明、社会は、ムーの子たちが創ったの。自由に好きなようにね。
私たちは、その場所を提供しただけ」
「それなら楽しそうだね」
「そうね、とても楽しい文明が出来たわ……みんな笑ってたし……みんな仲良かったわ。
そういうムーの子たちの楽しさがテラにも伝わって、テラもだいぶ楽になったのよ。
でもね、それが気に入らない人達がいた……
そう、レプティリアン達、そしてアトランティスの人達。
そうよね、レプティリアン達は逃げ出した人々を良い思いで見るわけないし、
アトランティスの人達は、自分達がこんなに苦しい生活をしてるのに、
ムーの人々は楽しそうにしてる……気に入らないわよね」
「そりゃそうだわ……苦しい生活をしてる人から見れば腹が立つよね」
「で、アトランティスの人達は、ムーを攻撃し始めたの」
「そんなぁ、高いテクノロジーを持ってるレプティリアン達に攻撃されたら、
ムーの人々はひとたまりもないでしょ？」

「でもムーの文明には直接関与してないとは言っても、一応私たちもいるからね……
いや、私たちは攻撃とかはしないわよ、でも、レプティリアンとは同じくらいの
テクノロジーは持ってるから、彼らも直接的に手を出しづらい状況ではあったの、
だから、レプティリアンが直接攻撃してくることはなかったの。
そうね、まぁ攻撃といっても、アトランティスの人達が、
チマチマ意地悪してくるくらいだったわ（苦笑）。

でもね、あるとき、笑えないことが起きたの」
「何？　どうしたの？」

「ムーをいつか攻撃しようと思って、アトランティスの人達は、武器を開発してたのよ。
その開発中に間違って、その武器をテラに放射してしまったの」
「テラは？　どうなったの？」
「ものすごい衝撃を受けて、その影響でボンって膨らんじゃったの。
ポップコーンみたいにね。それから、グルグル回り始めてしまったの。
膨らんだ影響で、土地は割れるし、グルグル回ったために大きな洪水が起きた。
テラの表面にいる生物たちはそれこそひとたまりもなかったわ。
アトランティスの人達も、ムーの子たちも、ほとんどが死んだわ」

「だろうね……」
「でもね、そんな中、何とかムーの子たちを百人ほど救出することが出来たの。私たちはその子たちを、安全なところに避難させたの」
「レプティリアンは？　どうしたの？」
「さっさと逃げちゃった（笑）」
「アトランティスの人達を放っといて……
そりゃそうか、ただの使役のための人間だもんな。で、テラはどうなったの？」
「しばらくグルグル回ってたけど、やっと何とか止めることが出来たの。
そして、ずいぶんかかったけど、何とかヒーリングすることが出来て、
また前のテラのようにいろんな植物や動物たちが生まれて賑やかになってきた時にね……」
「なった時に……」
「また、レプティリンアン達が戻って来たのよ……」
「またぁ～～？　だって、逃げてどこかに行ったんでしょ？」

「やっぱりテラが良かったみたいよ……人間達も使いやすかったみたい」
「使いやすかったって……聞けば聞くほど腹が立つなぁ～～もう」
「まぁ、良い悪いじゃなくて考え方の違いだから仕方ないわね」

「そうなの？　して良いことと悪いことってあるでしょ？
人間を奴隷みたいに使うなんてしてはいけないことじゃないの？」
「まぁ、その話になるとすごく難しくなるから今はやめとくけど、宇宙にはあなた達の常識とか、善悪の判断とかはないの。こちらから見たら酷いと思うけど、あちらから見たら正しいと思うこともあるでしょ。
だから、一概にこれが正義でこれが悪……という判断はないのよ。
イヤなら関わらなきゃいいんだからっていうことなのね」
「何かわからないけど、そうなんだ……じゃあ、レプティリアンを止める人もいないってこと？　してることは悪いことだよ、止めなさい……って言う人はいないの？」
「私たちも一応話はするわよ……でも、強制的にやめさせることは出来ないわ、それは自由への介入になってしまうから。もし、レプティリアンの社会がイヤなら、ムーの人々みたいに自分で出る、離れるしかないの」

「ふ～～ん。わかったような、わからないような……
で、その戻って来たレプティリアン達はどうしたの？」
「また、同じような文明を創り始めた。それが、シュメール文明から始まって、エジプト文明、メソポタミア文明、インダス文明、黄河文明などといわれる文明なの。その文明の社会システムが今もなお、西洋社会として続いてるってわけ」

「アトランティスから今までつながってるんだ……」

「そしてね、また同じことが起きたのよ……歴史は繰り返すってこと」
「またテラが苦しくなった？」
「そう、よくわかったわね」
「わかるよ、そのくらい……で、またテラに助けを求められた……ってことね」
「そう、でももうその頃にはテラの表面はほとんどがアトランティスのような文明ばかりになってたの。そしてね、もっと困ったのがムーの人々のように、その社会から離れたいと思う人達がいなかった。どうしようかとずいぶん考えてね……そしてまたムーの人々にお願いすることにしたの」

「ムーの人々って、生きてたの？」
「テラの大惨事のときに百人ほど救出して安全なところに避難させることが出来たって言ったでしょ……その人々の子孫たちがまだそこにいたの。その彼らに、申し訳ないけどテラの表面でもう一度生活してもらえないかしら？……って。」
「ＯＫしたの？」
「気持ちよくＯＫしてくれたんだけどね、今度は場所が問題になった。テラの表面上はほとんどがアトランティス状態よね……その中でまたムーのような文明を

創るのは至難の業だわ。でもね、テラの表面を探していたら、
彼らの文明から遠く離れた所に小さな島を見つけたの。
それが今、日本列島と呼ばれてるところ。そこなら海で囲まれてるし、
大陸からも離れてる……そして小さいから目立たないしね。
だから、この日本列島でムーの子孫たちに暮らしてもらうことにしたのよ」

「それが、縄文の人々になった？」
「そう、縄文の子たちは、ムーの平和な文明を受け継ぐ人々なの。
ムーの人々の考え方を受け継ぎ、平和な文明を創っていったのよ。
そうして一万年以上争いのない社会が続いたわ」
「でも、その後大陸からたくさんの人達が移住してきて、
縄文の人々は追いやられてしまったんでしょ。
その後は、戦乱の世の中で、やっと江戸時代が出来て少し平和になったのに、
また明治維新で日本は混乱の中に叩き込まれた……
結局、どうやってもそのムーの人々はやられてしまうんじゃないの？
さくやさんは、歴史は繰り返すって言うけど、じゃあ、この後もまた日本に住む俺達は、
外国からの勢力に追いやられてしまって、行く所が無くなってしまうってこと？
だから今また外国人がどんどん日本に来ているってことになるんでしょ？

そんなの、絶望しかないじゃない。日本人は、結局いつも悲劇で終わってしまうんじゃ、希望も何も無くなってしまうよね。俺達にさくやさんは、諦めろっていう意味で、この歴史を教えてくれてるの？　そんなのいらないよ。
そんなんなら真実の歴史なんて知らなくて結構だよ」
「まぁ、落ち着きなさいって……私も諦めさせるために話をしてるんじゃないんだから」
「じゃあ、何か方法があるってことなの？」
「そう、でもそのためには真実の歴史を知らないとダメなのよ。
だから、ちょっとイヤな話だけど、今まであなたに伝えてきたの」
「どうすればいいの？」

「あなた達日本列島に住む人々が消えればいいの……」

「ちょっと待ってよ……まったく意味がわからないよ……消えるって？
消滅するってこと？　何、すごく酷いことをサクッと言っちゃってるの。
なんだかんだ言って、結局は駆逐されるってことなんだろ。絶滅危惧種かよ、俺たちは」
「話を勝手に先取りして、そんなにプンプン怒らないの。ちょっと冷静に話を聞いて」

「なんだよ」
「次元を変えて見えなくなるってことなのよ……次元を住み分けるってことなの……」
「は〜〜、また意味不明のことを言い出したよ……次元を変えて見えなくなる？
今度はお化けかよ、死んでお化けになりゃ、そりゃ見えなくなるわな。
でもそれって結局ムーの人々や、縄文の人々みたいに駆逐されるってことでしょう？
日本人は、この世から消えるってことなんでしょ？」
「もう、そんなこと言ってないでしょ……聞きなさいってば。
いい、消えるっていうのはね、見えなくなる、
目の前からいなくなる……っていう意味なの。わかる？」
「まったくわからない」
「たとえばね、話が合わない人とは付き合わないでしょ？趣味が違っても合わないわよね。
プロレス会場には、プロレスが好きな人しかいないわよね。編み物教室には、編み物に
興味のある人しか参加しないわよね」
「そうだよね……」
「ということは、プロレスに興味がなくて、編み物教室に行く人は、
プロレスが好きな人からは見えない。でしょ？」
「見えない……まぁ、接触はないかな」
「そういうことなのよ」

「どういうことなのよ？」
「プロレス会場には、プロレスに興味がなくて、編み物が好きな人はいないってこと。
そして、編み物に興味がなくて、プロレスが好きな人の現実の中には、
プロレスに興味がなくて、編み物教室に行く人は存在しないってこと。わかる？」
「何となく……」

「編み物が好きな人をAさんとするわね。プロレスが好きな人をBさんとするわね。
Aさんの現実にはBさんはいない……そうでしょ。
Bさんの現実にもAさんは存在しない。そうよね。
ということは、AさんとBさんは、お互いが見えないし、存在してることもわからない。
AさんにとってBさんは、テラにいないのと同じことになるの。
Bさんにとっても同じことよね。
まったく接触しないんだから……
自分の現実の中にいない人は、その人にとっては存在しない人だってこと。
テラにはたくさんの人が住んでるけど、すべての人を知ってるわけじゃないわよね。
あなたのまわりにいる人だけしか、あなたと接触のある人だけしか、
あなたの現実には存在していない、見えてない。

そして、あなたのまわりにいる人は、あなたと同じような考え方、趣味、価値観を持っている人だと言える……そうよね。
会社とかで、意見が合わないとか、考え方が違うとか、そりが合わないとか、ちょっとしたことはあるとは思うけど、その会社に興味を持って、その会社で働いているってことは、そこのところの考え方（その職業が好き、とか、この会社の雰囲気が好き、とか、ね）が似てるってことなの。
だから、あなたのまわりにいる、現実に存在する……ってこと。

でね、会社についての考え方だけが似てる場合は、会社だけの付き合いになるから、会社を離れればその人とは合わないわよね、休みの日にわざわざ会うこともないでしょ……ということは、休みのあなたの現実には存在しない。会社から出れば、あなたの目の前、現実から消えるってことになる。
それが、私が言ってる消えるってこと。理解出来た？」

「考え方が違う人とは合わない……考え方が違うと消える？」

「そう、だから、今、日本列島に住んでる人々も、〝今の日本列島〟から消えればいいのよ」

「ちょっと待って、日本列島はひとつしかないから、そんなの無理でしょ……物理的に」
「物理的にはね……ここからがまたＳＦみたいな話になるんだけどね……
日本列島はたくさんあるの」

「またまたぁ～～、もう、そんなこと有り得る訳ないじゃない。
そんなこと言ったらテラだってたくさんあることになるでしょ？　無い無い」
「あるんだって、テラもたくさんあるの。
これが、あなた達の知識では理解しにくいところなんだけどね……
あなたも波動とか、周波数とか、振動数とかいう言葉を聞いたことあるでしょ？」
「そう言えば、最近そんな言葉を耳にすることはあるけど……」
「その波動（振動数、周波数）が、カギになってくるの」
「まったく理解できない……」

「う～～んとね、テレビとか、ラジオとか、それぞれのチャンネルを持ってるわね。
ラジオがわかりやすいかしらね……ラジオはいくつもの番組を同時に放送してるでしょ。
でも、別に混線するわけじゃなく、聞きたい番組だけを聞くことが出来る。
その人が聞きたい番組を選んで、それに合わせてチューニングすれば、その番組が聞ける。

そして、興味のない番組は聞かないから、その人にとっては関係のない世界になる。
無いのと同じ番組、無いのと同じ世界……そんな感じでイメージしてみて」
「そりゃ電波は物質じゃないから、可能だけど、
日本列島は物質なんだからそんなの無理でしょ」
「物質もね、電波と同じように振動してるの。
だから、その振動数によってたくさんの物質になることが出来る……」
「あ〜〜、もう無理、まったくわからない」
「そうね、この波動（振動数、周波数）がわからなければ、どれだけ歴史の話をしても
理解出来ない……ただの妄想、ただの創り話、ただのつまらないＳＦ小説になっちゃう
……だから、ちょっと歴史からは離れるけど、波動の話をさせてね。
もう歴史を繰り返さないためにね」

「歴史を繰り返さないために……波動の話……
あ、ちょっと待って、その前にまだ疑問があるんだけど」
「なに？」
「縄文の人々は大陸から入って来た外国人？　弥生人？　達に、追いやられてしまって、
その弥生人達が日本列島に住み着いたってことでしょ？」
「そうね」

「なら、いまの日本人は、その外国から来た弥生人達の子孫ってことになるんだよね。
ちょっとは、縄文の人々のＤＮＡが入ってるとは言っても、
もうほとんどが弥生人達の子孫って言っていいんだよね」
「そうよね」
「なら、日本も外国と変わらないってことじゃない。
さっき、さくやさんは外国人は、日本人が嫌いだから、いつも日本を支配しようとする、
その歴史が繰り返されるって言ったけど、弥生時代になった時点で、
もうその必要はないんじゃない？　だって、同じ人種の人達が日本に渡って来たんだから、
嫌いな日本人じゃないでしょ？　仲良く出来るんじゃないの？」

「私はね、日本人が嫌いだから……って言ってなくて、日本列島に住む人々が嫌いだから
……って言ったの。　彼らが嫌っているのはね、日本人じゃなくて（種族じゃなくて）
日本列島に住む人々なの」
「日本人じゃなくて、日本列島に住む人々？？　どういうこと？」
「それもね、波動の話がわからなきゃ理解出来ないのよね～」
「そこでも、また波動の話になるんだ……」
「そう、波動の話……それは違う言葉で言えば、宇宙の話になる」
「こりゃまた、すごい話だねぇ～～……宇宙の話って、どこまで話は広がるんだよ～～」

「宇宙がどうやって出来たか、知ってる？」
「知るわけないでしょ、ある日ビッグバンが起きて宇宙が出来たとか、いろんな説があるけど、誰もわからないよね。どんなに研究しても答えは出ないでしょ」
「あなた達のように、物質的なところばかり見ていても宇宙のはじまりはわからないわ。だって宇宙は物質ではないから……」
「宇宙は物質じゃない？　もっとわからなくなった……」